

の『筆のすさび』などに記載があり、ほぼ間違いないとされている。

この飛行で岡山を追われた幸吉は、駿府（現静岡市）で入歯師をしていた。

彼の墓は、静岡市大工町の福泉寺と磐田市見附の大見寺にある。

『静岡県歯科医事沿革史』（1966年刊）によると、「幸吉は備考齋と名乗り、現在の江川町に住み、浮田姓を名乗って口中入歯と時計修理を開業した。また、晩年は雑貨商を営んだ」とある。

福泉寺の墓石の花立の石には、浮田、前石に備考齋、墓石の正面には、釋諦現、釋妙現、不退位、右側に嘉永四年亥三月廿五日 備前児島郡八浜 櫻屋瀬兵衛倅幸吉 没年六十八歳と刻まれている。左側に明治二年正月に死去した妻の名がある。寺の過去帳は、戦災で焼失した。

一方、大見寺に伝えられる幸吉は、この地で食堂を営み、91歳で没したと伝えられている。

寺には過去帳が現存しており、嘉永四年三月廿五日、釋諦玄居士 備考齋と欄外に朱筆してある。墓石は、弘化四年未年八月廿一日演譽清玄居士 備前屋幸吉とある反対側に、釋諦玄居士と彫ってある。

12) 小田野直武につながる角館（秋田）の歯科医

On Dentists in Blood Relation with Naotake Odano (1749~1780), the Painter of Kaitaishinsho (Japanese Translation from "Ontleedkundige Tafelen" by J. A. Kulmus. 1734)

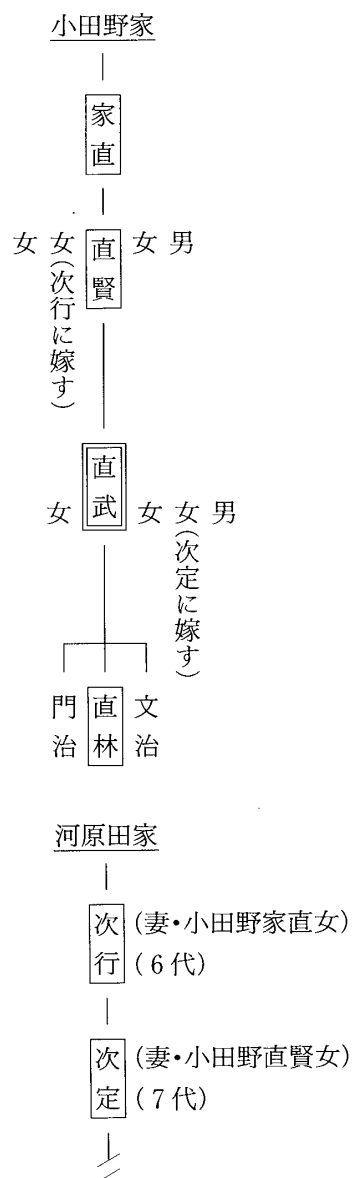
九州歯科大学 ○嶋村 昭辰
内山 長司
梶山 稔
福山 宏
小林 繁

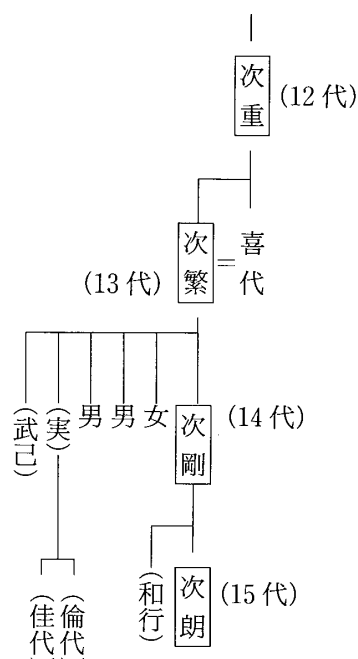
Akitatsu Shimamura, Choji Uchiyama, Minoru Kajiya, Hiroshi Fukuyama and Shigeru Kobayashi

みちのくの小京都と呼ばれる秋田県仙北郡角館（かくのだて）町の武家屋敷、その他が観光ルートのひとつとして脚光を沿びてきている。その武家

屋敷のほとんどは、名門の河原田家と青柳家が占めているが、その一角に、解体新書の絵師として関係者によく知られている小田野（直武）家の屋敷も保存されている。この小田野家は河原田家とは、直武の叔母と長姉を通して姻戚関係にある。その河原田家から現在5名の歯科医師が出ていて、絵画への素養をもつものがある。

両家とも先祖は、慶長5年の関が原の役後、佐竹氏が常陸から出羽・秋田への国替えに従って移った角館城下の藩士で、家老職につく河原田家の分家が現在の河原田家である。小田野家は佐竹家の組下となった角館給人である。両家の家系略図の所要箇所だけを示すと次のようになる。





() 内が歯科医師

河原田家 13 代目の 4 男の実は九州歯科大学昭和 34 年卒，九州大学医学部大学院修了，札幌医科大学歯科口腔外科教室を経て，現在秋田市にて開業。5 男の武己も九州歯科大学昭和 42 年卒，東京医科歯科大学歯科矯正学，東北大学歯科矯正学教室の研究生を経て，現在秋田県横手市にて開業。実の長女は，日本大学歯学部平成 5 年卒，同大学小児歯科学教室研究生，次女も日本大学歯学部平成 6 年卒，現在歯科臨床研修医。15 代目の弟，知行は新潟大学歯学部卒で，現在同大学の研究生である。

小田野直武の直系は断絶しているが，叔母と長姉の血を通して河原田家につながれ，後えいの 5 名が絵師の本命とは異なるが，絶妙な手技は歯科医師として生かされていることになる。

13) 『御用控帳』にみる木床義歯

The Wooden Plate Dentures found in
“Goyo Hikae—cho”

日本歯科大学 新藤 恵久
長谷川 弥

Yoshihisa Shindo and Satoshi Hasegawa,
Nippon Dental University

井伏鱒二は、『文芸春秋』1966 年 1 月号に「御用控帳」という題で，入歯師としての岡山の幸吉を

取り上げている。以下はその中の木床義歯に関する部分の抜粋であるが，作家の目から見たツゲの木の特徴や入歯師の心得入歯の製法など興味深い記述が多くみられる。

「人にして空を飛ぶ技を弄するは，鳥虫の卑しき様を真似るものにして人道に非ず。慰みと雖も一罪なり

そういう申渡しで幸吉は城下弓之町の牢屋敷長屋に入れられて，岡山のいわゆる弓之町の叩払いという刑に処せられた」

「幸吉はよんどころなく東海道駿府の町へ流れて行き，手先の器用な男だから時計の修理と入歯屋を兼ねながら余生を送ったと言われている」

鱒二は入歯師としての幸吉については「御用控帳」にある幸吉の表具師仲間の朔次郎の供述から引用したとしている。

「もともと入歯の技術は岡山にいる頃から余技として習っていた。このことは備後小島藩の御用控帳（文化十四年度）の取調控書のうち，表具師朔次郎という者の陳述を書きとめた記録によって知ることが出来る」，「幸吉は表具仕事の手の空くたびに橋本町の入歯屋へ出かけていた。ときには入歯にする蠟石を持ち帰って夜ふけまで鑢で磨いていることもあり，のみ細工で象牙を前歯の形に削っていることもあった。現在の職業別でいえば歯科医院の技工師のようなことをしていたらしい」

入歯師の心得について「人の口をいじるのが商売だから，入歯師というものは酒も煙草もいっさい避けるべきだと言っていた」と幸吉の出入りしていた橋本町の入歯師の言葉としている。

入歯の製法は次のように書いている。

「総入歯の顎の台は黄楊の木一株だから削れば虎斑が出る。顎にぴったり着くように削るには，紙でくるんだ栗団子を患者の歯齦に押し当てて，それを雌型に白土を溶かして流しこみ，栗餅を静かに焼きこがしながら乾かした白土を見本に細工をする。朔次郎は物好きから入歯技術の手ほどきをしてもらい，束修を出して歯の抜きかたや，抜け歯の入れかたなどを教わった。総入歯の作り方も教わった。抜け歯を入れるには，蚤または栗の木の子から採った糸で隣の歯に結びつける。一番難しい技術を要するのであった」

これはあくまでも小説ではあるが，作家・井伏